

## 第14回研究大会学会主催シンポジウム「今、求められる家庭教育支援とは：子どもの生活から問題を考える」

古賀，倫嗣  
熊本大学教育学部社会学研究室

<https://doi.org/10.15017/1485122>

---

出版情報：生活体験学習研究. 14, pp.49-52, 2014-01-25. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：

第14回研究大会  
学会主催シンポジウム（概要報告）

「今、求められる家庭教育支援とは  
— 子どもの生活から問題を考える —」

日 時：2013年1月26日（土） 14：00~16：30

会 場：熊本大学教育学部



## 学会主催シンポジウム

# 「今、求められる家庭教育支援とは —子どもの生活から問題を考える—」

### 【登壇者】

三角 幸三

(宇城市教育委員会学校教育審議員)

柴田 恒美

(特定非営利活動法人「子育て談話室」理事長)

松本孝一郎

(社会福祉法人「菊水学園」理事長)

永田 誠

(西九州大学短期大学部准教授)

### 【コーディネーター】

古賀 倫嗣 (熊本大学教育学部教授)

## 1. はじめに

現代日本社会における家族変動・地域変動は、多様な「家族問題」「子ども問題」を生み出している。このため、現在国においては「家庭教育支援チームの創設」「子育てサポーターリーダーの養成」「子育て・親育ち講座の実施」等の家庭教育支援施策が進められている。こうしたサービス施策は、「子育て不安」に直面する保護者にとっては有効な「光」としての役割を果たしている半面、現実的には「子育て委託」「子育て放棄」という「影」の問題を結果していることも指摘されている。

昨年度、佐賀研究大会の課題シンポジウム「家庭教育支援の光と影」は、現代の家庭教育支援について、「1.57ショック (1989年)」に始まる平成の「家族」と「子ども」をめぐる諸問題を振り返り、「保護者に対する学習の機会及び情報の提供 (教育基本法第10条)」を図る「家庭教育支援」の役割について議論を深めることを目的とした。その議論の中で課題とされたのが、「子ども自身が抱える問題」からの現状と課題の分析であった。

こうした本学会の課題認識に基づき、熊本研究大会では、「今、求められる家庭教育支援とは—子どもの生活から問題を考える—」をシンポジウムのテーマに掲げ、「子どもの生活」という視点から問題

を位置づけ、「支援者」育成の観点から「家庭教育支援」の内容と方法の諸課題について議論を焦点化することを目的として開催された。登壇者には、家庭教育支援の立場から「熊本『親の学び』プログラム事業」等の実践に関わる、三角幸三、柴田恒美の両氏、社会的 (児童) 養護の立場から「菊水学園」理事長の松本孝一郎氏をお迎えして、「子どもの自立」を支える「支援・援助」の在り方について討議を行った。シンポジウムには、社会教育学の立場から永田誠会員にも登壇いただき、本学会が果たしてきた理論的な蓄積を踏まえ、実践の取り組みとどのように「架橋」することが可能か、議論を深めた。全体としては、「家庭教育支援」の背後にある「子どもの真のすがた」を共通理解し、「今、支援者に求められるもの」、さらには家庭教育支援を支える「社会性、公共性の論理」についての議論を深めるものとなった。

なお、熊本県では、2012年12月、「保護者が親として学び、成長していくこと、子どもが将来親になることについて学ぶことの促進」を目的として「くまもと家庭教育支援条例」が成立した。県条例としては全国最初の取り組みとなったが、この背景には「家庭教育支援」推進の困難さがある。このため、熊本県教育委員会は2009年から「くまもと『親の学び』プログラム」の作成を開始した。同プログラムは、「スタート編 (乳幼児期)」「スマイル編 (小学生期)」「ステップ編 (中高生期)」「次世代編 ((中高生対象)」の4編から構成され、熊本県教育委員会のホームページで閲覧ができる。参考資料として、本報告の最後に、「スタート編」の概要を示した資料を掲載する。

## 2. 「家庭教育支援」を担うファシリテーターの育成

公立学校教員・校長として学校教育分野、県社会教育課、社会教育施設等の職員として社会教育分野、両方の豊かな実践経験を持ち、「地域活性化伝道師」としても活躍している三角幸三は、「子どもたちの今」について「コクーン (繭) 化」と捉え、集団で遊ぶことより独りでいることを好む実態を指摘した。友だちと一緒にいながらゲーム機相手の独り遊びという姿である。ここでは、「自尊感情」も「他尊感情」も育たない。他者に褒められても、自ら否定

してしまう姿が紹介された。

熊本県は「いじめ」問題について全国的にも早い段階から早期予防・早期対応マニュアルに取り組んでいるが、そうした取り組みに深く関わってきた三角は、学校教員について「指導は上手だが、カウンセリング能力は低い。」と分析、改善のキーワードは「よく聴くこと」と強調した。教員一人で対応するのではなく、そういう能力やスキルを持つ人たちとのネットワークで対応することの有効性と的確性を実際の体験から主張し、家庭教育支援についても、同様の取り組みが必要であり、そうした視点からの支援者育成が求められると述べた。その内容に関しては、「子どもの居場所づくり」の視点とともに「母親と母親をつなぐ」視点の重要性を述べ、このためには知識の勉強ではなく、ワークショップなど、人と人がつながる手法をきちんと習得したファシリテーターの育成が行政に求められるとした。「今度会ったら相談に乗ってね。」「人（親）と人（親）をつなぐ視点」に基づく「支援」のあり方、当事者と支援者のネットワークが不可欠であり、それを作り出す「デザイナー」の役割の重要性を強く主張した。

### 3. 「家庭教育支援」と支援者の役割

養護教諭として「保健室の窓」から子どもたちをみてきたあと15年前に退職、「不登校」の子どもを対象とする相談事業に取り組み、その後2004年にNPO法人を設立、「つどいの広場」等の地域子育て支援拠点づくりを進めてきた柴田恒美は、「乳幼児期の問題」は「思春期の問題」の先取りであり、逆に「思春期の問題」は「乳幼児期の問題」の残された宿題と考えている。乳幼児期の子どもは、発達の上で「愛されている」という愛着形成が不可欠であるが、親の生活時間の多忙化はそれを満たすことが困難であり、また子ども同士のぶつかり合いも「親の口出し・手出し」により自らの生の体験とはならない。中学生になった時、「座れる膝がなかった。」とようやく言えるようになった子どもたちにとって、「顔の見える関係としてつなぐ」ことはきわめて重要である。

子育てサロンでの経験から、親と仲良くなるためにはまず子どもと仲良くなることの重要性を指摘、元気な親は自分からつながっていくが、それができ

ない親を「スマイルママ」にしていく働きかけが必要になる。『「親の学び」プログラム』等、熊本県の取り組みを中心に子育て支援を担う「支援者」育成に求められる課題を「顔の見える関係でつなぐこと」、「基本的なスタンスとしての『傾聴』」とまとめた。その一方で、「被支援者から寄りかかれることは気持ちがいいが、一生できるわけではない。」と、「ほどよい距離の置き方」と「突き放し」という支援者にとってなかなか習得しにくい過酷なスタンスにもきちんと言及があったことも付け加えておきたい。

### 4. 「児童福祉」における子ども援助の在り方

教職14年の後、1992年から児童養護施設「菊水学園」の副施設長、2005年からは理事長（兼施設長）を務め、熊本県民生委員児童委員協議会主任児童委員部会長として「熊本県次世代育成支援行動計画」等の策定に積極的に関っている松本孝一郎は、「帰りたくても帰れない家庭」、「壊れてしまった子どもたちの家庭」の状況を踏まえ、入所児童の「心のトラウマやダメージ」について紹介し、親の側にも面会に行っても子どもとの関係が作れないという問題があることを指摘した。

厳しい環境の中で「自立」を目指さなければならない子どもたちを援助するプログラムについて、援助の場面では、それまでの家庭生活で失われたと思われる子どものダメージを検査等で分析し、課題解決につなぐとともに、自立に向かう手立てを保育士、児童指導員、心理士等のスタッフと協同して作り上げるプロセスを紹介した。そして、子どもの特性を把握しこういう場面ではこういう行動が起きるということを見通した意図的な働き掛けの重要性に触れつつ、その上で「だめなことはだめだ。」という言葉で「18歳になったら（児童養護）施設を出る」ことを想定した自立援助の理念とスキルについて述べた。

### 5. 「生活体験学習研究」における家庭教育支援の位置

永田誠は、佐賀研究大会の論議を引き継ぎながら、支援者が行う「実践」と本学会が果たすべき「理論」研究に関する課題整理を行った。本学会がこれまでどのような問題認識と研究課題設定をしてきた

かは、上野景三・永田誠・大村綾の3名による労作、「生活体験学習研究の理論的到達点を探る」(『生活体験学習研究』第13号、日本生活体験学習学会)です。すでに論じられているが、本シンポジウムでは「家庭教育」「子育て支援」の視点からの考察・分析に基づき報告した。

永田は、基本的な研究枠組みをプログラム(学習内容)研究とシステム(推進方法)研究の2つの領域に分け、「プライベートな問題」としての子育てが「社会や地域が支援すべき問題」へと転換する論理を、1989年以降の家庭教育支援の政策動向を基に検証し、私たちにとっては「その背後にどのような社会を構想するのか」が問われていると指摘した。それを踏まえ、現行の子育て支援システムの妥当性・公益性を社会的な支援ネットワークを支える「新しい公共」の概念から問題提起した。

支援者に求められるものとして、永田は具体的には「保育士養成カリキュラム」を紹介し、多様な問題状況と個別的問題状況という視点(この事例ではうまくいったとあって、他の事例でうまくいくとは限らない)の実践性にふれつつ、支援者の専門性の養成のためには、当事者自身が振り返りのできる子育てが必要であり、子育てがひと段落した時に「支援者の役割」を果たすという「省察的实践(ドナルド・ショーン)」の中で理論的な検討を開始することの今日的な意義を強調した。

## 6. まとめ

「家庭教育支援」は、「多様な家族」という現在の社会状況の中で「多様な支援」の在り方を求めている。親としてのエンパワーメント(親育ち)を促す家庭教育支援活動と「児童虐待」等に関わる社会的養護の専門家が「子ども」を支えるため、どのような連携のネットワークを構築していくべきか、「支援者」の役割についてシンポジウムの討議は進められた。そうした「当事者」と「支援者」とのつながりを展望する意味で、昨年度佐賀研究大会シンポジウムで、武雄市小鳩の家保育園の井上一夫元園長が述べた、「コミュニティ活動における共助によって『本当の豊かさ』『新しい価値』が見え始めるのではないか、その具体化には、水平的な地域の『緩やかな人のネットワーク』が求められる。多様な人材が

緩やかにつながりワークする、そのようなイメージで地域ネットワークを創出・育成していきたい。」という言葉の思い出した。

今回、そういう発言を取って1つだけ選ぶとすれば、松本の「支援をするためには、壊れている家庭、傷ついている子どもの行為だけを見るのではなく、その気持ちを正しく理解することが第一だと思っています。増えつつある児童虐待を正しく理解することにより、しなければならない支援が見えてくると思います。」という発言である。この言葉は、家庭教育支援に現在関わっている人、これから支援に関わろうという志を持っている人など、多くの人たちの理解と共鳴を得たことだろう。(文中敬称略)

文責：古賀 倫嗣(熊本大学)

### くまもと「親の学び」プログラム

～子育ては親育ち～

スタート編  
(乳幼児期編)



熊本県教育委員会

#### 1 くまもと「親の学び」プログラムとは?

このプログラムは、乳幼児期の子どもをもつ保護者をはじめ、「親の学び」をスタートする保護者を対象とした家庭教育の参加体験型講座を進行するための解説書です。


参加体験型講座では、保育所や幼稚園職員、乳幼児健診を行う保健師など、子育て支援に関わっている人たちが、進行役(ファシリテーター)となります。

参加体験型講座で、進行役は、プログラムを通して、一方通行の講座ではなく、受講者の気づきをサポートしつつ、参加者に伝えたいメッセージやねらいを明確にして、一緒に講座をつくりあげていこうとする気持ちが大切です。

そのためには、参加者の人数、参加者の年齢構成、講座設定時間等に応じて、アレンジして活用してください。

このプログラムを通して、子育てを行っている保護者が、自信をもって、健やかな子どもを育てていこうという意欲を高める一つの手がかりとなれば幸いです。

プログラムは基本となる展開例等を示しています。それぞれで実践していただき感想等をいただければ幸いです。実践しながら増補していきたいと思います。



- 3 -

2 参加体験型学習（ワークショップ）とは？

くまもと「親の学び」プログラム講座は、参加体験型学習（ワークショップ）という形で行います。参加体験型学習とは、講演会や講義のように、講師の話に参加者が一方的に聞いて学ぶのではなく、参加者同士で作業をしたり、話し合ったりすることを通じて学びます。  
自分の子育てを振り返ったり、他人の話の聞いたことをききかけとして、これまで気づいていなかったことに気づいたり、改めて大切なことを再認識したりすることができます。

★参加体験型学習の流れ

各プログラムの趣旨に沿って、個人での作業、グループ（ペア）での活動、全体での活動の3段階を組み合わせて展開します。

①個人での作業

与えられたテーマについて考えたり、書き出したりします。グループでの活動の前に行う場合が多いです。

②グループ（ペア）での活動

個人で考えたことを話し合ったり、共同作業をしたりします。

③全体での活動

進行役から説明をしたり、各グループの話し合いで出た意見を共有したりします。  
講座の最初と最後に行うことが多いです。

★参加体験型学習で大切なポイント

ポイント1 主体的な参加

参加者一人一人が「受け身」になるのではなく、それぞれ考え、発言することによって、これまで気づけなかったことに気づいたり、もともと知っていたことについて、改めて大切であることを再確認したりすることができます。そのためには、一人一人が参加、発言しやすい雰囲気づくりが必要になります。

ポイント2 お互いに学びあう

グループ内で意見を出し合ったり、全員で気づきを発表したりすることを通じて、多様な視点や考え方があふれることに気づき、学ぶことができます。そのためには、お互いの意見を否定せずに関心を持って聞いたり、発言を引き出すような進行役からの声かけなどが大切になります。

3 進行役（ファシリテーター）の役割

参加体験型学習では、全体の流れを進めていく「進行役」（「ファシリテーター」ともいう）の役目が大切です。進行役は「講師」とは違い、自分の知識や考えを参加者に伝えることが役目ではありません。参加者同士の話し合いや作業がスムーズに行われるよう、参加者の様子を見ながら説明や声かけをし、参加者自身が「気づき」を得て何かを学ぶことを助けることが役目です。  
このため、専門的な知識や特別な経験がない人でも、以下のようなことに気をつければ、参加体験型学習の進行役になることができます。

★進行役に求められる3つのこと

(1) 雰囲気づくり

- ・進行役は、自信をもってはっきりした声で、ゆくりと話す。笑顔が1番
- ・話し合いの前に、「正解や間違いはない」ことを参加者に伝え、参加者は発言しやすく感じる。
- ・発言を強要しない。話せる範囲で話してもらえとよいことを伝える。

(2) 主体性の尊重

- ・進行役自身の考えを押しついたり、参加者の発言を批判したりしない。
- ・参加者の意見が無理に一つにまとめる必要はない。一人一人が気づいたことを大切にするように促す。

(3) 流れの調整

①参加者に合わせた進行

- ・参加者が活動や作業の手順などを理解しているかどうか、確かめながら進める。
- ・参加者の様子を見て、じっくりと時間が必要な場合には、用意した内容の全てを行うことにこだわらないほうがよい。  
（計画の段階で、時間よりも早く進んでいる場合どうするか、時間が足りなくなりそうな場合どうするか等を考えておくと、その状況になったときに慌てない。）

②テーマに沿った進行

- ・漠然と雑談をするよりも、各プログラムの「テーマ」をはっきり示すことで、より話し合いが深まる。
- ・話題がそれた場合は、発言者の意見にも同調しながら、テーマに戻すように心がける。

4 講座の基本的な流れ

順	流れと活動	時間	説明
1	【導入】 ①活動のねらいを知らせる。 ②アイスブレイクをする。	10分	<p>★ポイント ・活動のねらいをわかりやすく伝える。 ・場の雰囲気を和らげる。 ・次の活動をやりやすくする。</p> <p>○本講座のキーワードを知らせる。用紙等を書いておき、提示する。プロジェクターを使ってもよい。 ○簡単なゲームなどで雰囲気や参加者の緊張を和らげる活動を「アイスブレイク」と呼ぶ。 ○本プログラムで取り上げている活動は、一例であり、 ◇講座設定時間 ◇目的 ◇人数 ◇場所の広さ ◇受講者の構成メンバー 等に応じて、次のアイスブレイクを取り入れるかを考えたり、内容など工夫する必要がある。 ○次の活動をグループで行う場合は、アイスブレイクのゲームでグループを作ると効果的に進行できる。</p>
2	【展開】 ①中心活動をする。 ・個人での活動 ・ペアやグループでの活動 ・全体での活動	40分	<p>★ポイント ・やりかたをしっかりと説明する。 ・グループを見せまわり、声をかける。 ・時間を意識する。</p> <p>○参加者が「正しく答えよう」「変なことを言わないようにしよう」と思うと、発言しにくくなる。 ○グループでの活動の時、思うように話し合いが進まない場合は、次のような対処法がある。 ①スムーズに進んでいるグループで出された意見や活動の様子を紹介する（全体の活動を止めて、短時間で行う） ②思うように話し合いが進んでいないグループに、進行役（ファシリテーター）がしばらく入り、進行を助ける。</p>

順	流れと活動	時間	説明
3	【まとめ】 ①振り返り・分かち合う。 ②活動をまとめる。 ※「家庭教育手帳」の読み合わせ ※「くまもと家庭教育10か条」の読み合わせ	10分	<p>★ポイント ・振り返りは必ず入れる。 ・振り返りのポイントをはっきり伝える。 ・時間を意識する。</p> <p>○活動を通して気づいたことを個人で振り返りシートに記入し、グループで発表しあう。他の受講者の思いや多様な価値観にふれ、これまでの自分を見つめ直し、これからの子育てのための気づきを得ることができる。 個人グループ全体と広げ、個人の振り返りを互いに共有すると、より学びが深まる。 ○進行役は、参加者の振り返りと関連づけながら、講座のポイントを伝える。 ○まとめでは、「家庭教育手帳」や「くまもと家庭教育10か条」を紹介する。必要に応じて受講者に配布したり応用紙に書いておいたものを提示したりしながら、みんなで確認し、意識を高める。</p>

★講座の受講者、進行役、すべての人が  
気をつけること

★講座の中で知り得た個人情報を他の人にもらすことは  
絶対やめましょう。

○講座の始まりや講座終了の時に、受講者に確認しましょう。  
もちろん、進行役も知り得た情報はもらえません。  
とても大事な事なので、毎回の講座で確認するようにしましょう。